

施設に居住する高齢者の日常体験を描き出す試み ——外へ出て - 内に帰ることに注目して

松本光太郎 名古屋大学エコトピア科学研究所
Kotaro Matsumoto EcoTopia Science Institute, Nagoya University

要約

著者は、高齢者が居住する特別養護老人ホームに通い、入居者と室内外においてともに時間を過ごすかわりを重ねてきた。入居者とかわり続ける中で、施設環境は高齢者が生活する場所として大切な何か、言い換えると、当たり前を訪れるべき何かしらの日常体験が欠けてしまっているように感じられてしまう。その当たり前を訪れるべき日常体験として、本論においては「外へ出る」という事象に注目した。そして、外へ出ることに含まれる意味を探索するために、著者が同伴した入居者との外出に際して実現した行為や生成した体験を描き出し、さらに解釈を示した。それらの過程を経て、外へ出ることに含まれる意味とは、行為が実現し、体験が生成することそのものという見解を示した。つまり外へ出ることに含まれる意味とは、事象の外部から「意味的である」と指し示すものではなく、描き出された行為や体験の内部に入り込みその質を感受することであることを示唆した。最後に、施設環境においては「外」と「内(家)」という区分が自明なものとして定位できないことを指摘し、施設内外に潜在していると思われる行為や体験の整理を通して、高齢者の生活において大切な欠かさざることにより明らかにしていくことを今後の課題とした。

キーワード

高齢者, 施設, 外へ出ること, 日常体験, 描き出す

Title

Describing Daily Experiences of Elderly People Living in a Welfare Institution by Focusing on Going Out and Coming Back In.

Abstract

The author frequently visited a nursing home for the elderly, spending time and sharing experiences with residents. Through these experiences, it was felt that the environment, a place where the residents must live out the rest of their lives, was lacking something, such as those ordinary, daily experiences that we generally take for granted. This study focused on the act of going out as one such ordinary, daily experience. To investigate the meanings included in going out, the author accompanied some residents when they went out. This paper describes their actions and experiences, and presents interpretations of those events. The meaning of going out was found to be the very realization of actions, and the very generation of experiences, that leaving one's home makes possible. The results suggest that going out was not meaningful from a perspective outside of those events, but rather was meaningful only with respect to the actual process of sensing and internalizing the actions and experiences. It is hoped that the reader can also understand those qualities of the episodes described here.

Key words

elderly, welfare institution, going out, daily experience, description

午前中、掃き掃除を終えブラブラと廊下を歩いてきた私に北原さん（女性、当時 75 歳；以下、エピソードに記される名前は全て仮称である）が声を掛けてくる。私は「トイレかな」（北原さんは、最近よく声を潜めるように「お便所」と言う）と思っ

て近づき用件を尋ねると、「どこか行きたい」と言われる。唐突であったので私は返答に詰まり少し間が空いた後、「外にでも行きますか？」と私は北原さんに提案する。北原さんは少し考えて「外じゃない」と返す。「どこに行きたいんですか？」と尋ねると、「ここじゃないとこ」と話される。あまりに意味深な返答だったので、「（メモするために）忘れないように」と私は思ってしまう。私は「この（2 階）フロアを回ってもね〜!？」と「こんな提案ではダメでしょう」という意味を含んだ返答をするが、彼女からの反応はなかった。少し考えた私は、「とりあえずグルッと（2 階を）回りますか」と提案すると、北原さんは了解される。私は北原さんの車イスをゆっくりと押しながらフロアを 1 周まわる。まわっている時の北原さんは、例えば三島さんみたいにあちこちを見回りはしないし、進藤さんのように他の人の居室に入っていく様子もしない。1、2 度周りの様子をうかがっていたが、周りの環境に興味があるといった感じでもなかった。

昼食前であったので、北原さんがさっきまでの食堂の定位置に車イスをつけた。「こんなんでもよかったですか？」と尋ねると、「よか」とあまり表情を変えずに、いやむしろ変化があったのかどうか私には感じられないまま、北原さんのその言葉を受け取った。不満足といった感じでもなかったが。（平成 15 年 11 月のある日）

外へ出ていくことは、多くの生活者にとって当たり前過ぎて問われることのない事柄だと思われる。しかし、松本（2004, 2005b, 2005c）が示唆するように、経済性や生殖性など生産性を求める社会の第一線から一步退いたリタイヤ後の高齢者においては、外出をする機会が日々必然的に訪れるわけではない。外出する機会が失われがちになることは、高齢期へと移行する中で起こる変化の 1 つであると指摘することが出来るだろう。

自宅での生活が困難になり施設で居住している高齢者にとって、日常的に外出することは様々な事情（例

えば、認知症や身体の障害により安全性が問題とされる）が相まって、さらに不自由であるのが現実である。現在、宅老所に勤務する村瀬（2001）は、特別養護老人ホームで働いていた当初を以下のように回顧している。

「〔施設環境には〕『ラーメンでも食べに行こうか!』という、生活のなかでの臨場感がない。気がついたら、……ラーメンを食べに行くことにどんな意義があるのかということ、〔職員〕みんな話している……行く本人は、ラーメンが好きだから行くだけの話なのですが。』（〔 〕内は著者による加筆）

施設環境では、村瀬（2001）が述べるように、入居者の気分が乗った時、勢いにまかせて外出することは難しい。安全確保や衣食住の保証など施設居住の積極的価値はあると思われる。けれども一方で、施設環境は高齢者が生活する場所として、大切な何か欠けてしまっているように私には感じられてしまう。その大切な何かとは、冒頭に示した北原さんがふと言葉にした「ここじゃないとこ」へ行くこと、言い換えると「外へ出ること」に含まれている意味ではないかと一旦ゆるやかに定義する。

本論では、外へ出ることに含まれている意味とはどのようなことであるのか探索を行う。施設環境において、入居者が外へ出た時に何が起こるのか、それらの記述を通して外へ出ることに含まれている意味とはどのようなことであるのか考察を行う。

問題

「外へ出る」という主題が立ち上がった経路

(1) 当人の認識や外在的要因に関する研究知見

これまで外出行動に関して、行政（例えば、内閣府（2001, 2003））による意識調査において、身体的・精神的健康の指標として、外出に関する項目（外出頻度、外出する理由、利用する交通手段、外出時の障害

など)が取り上げられてきた。

それらの実態把握調査に加え、高齢者の自宅での「閉じこもり」状況に関連して、外出を取り上げる研究が行われている。河野(2000)は、障害を抱える在宅高齢者への訪問面接を行い、1週間に1度も室外に出なかった人を House-bound と分類し、1週間いずれの生活行動(家事的、文化的、社会的行動)も行わなかった人を不活発型としている。5m以上歩くことが出来、かつ Housebound - 不活発型を「閉じこもり」と操作的に定義し、5m歩くことが出来ず、かつ Housebound - 不活発型を「閉じこめられ」と定義している。そして、身体的特性、心理社会特性、家族介護環境特性を本人及び保健師と看護師に尋ね、「閉じこもり」―「閉じこめられ」タイプについて比較検討している。また、横山ら(2005)は、介護認定を受けていない高齢者を外出頻度により「閉じこもり」群―「非閉じこもり」群に分け、「閉じこもっている状態」の高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を質問紙により探索している。

これら一連の閉じこもりに関する研究において、横山ら(2005)によると、閉じこもる可能性を内包する要因を探るために、広く高齢者全般において「閉じこもりに繋がるであろう要因(以下、予測型要因)」を探索するアプローチと、すでに寝たきり等閉じこもり状態にある高齢者の身体的・心理的特徴から「閉じこもるに至ったであろう要因(以下、回帰型要因)」を探索するアプローチがある。横山らは、「回帰型要因」を探索するアプローチは、「閉じこもりを避けるべきもの」と前提に置いていると指摘する。その指摘の上で横山らは、「予測型要因」の探索を行っている。

しかし、閉じこもりに関連するであろう要因の探索を行うことは、「閉じこもりを避けるべきもの」と前提に置いていることに他ならず、横山ら(2005)が提起したと思われる「閉じこもりという事態に対する価値を保留し、閉じこもりという事態を理解すること」への応えになっていない。ここで求められるべきは、横山ら(2005)が本来指向したと思われる、閉じこもりという枠組み・構成概念を一旦保留し、高齢者が生活している事態そのものを探究することであろう²⁾。

以上の述べてきた問題は、外出頻度、移動能力、居住環境といった外出行動を理解することに寄与するで

あろう外在的な条件間の因果関係により外出行動を理解しようと目論む研究、例えば Carp(1971)における高齢者の特性(歩行頻度、性差、エスニシティ、身体的健康度、居住地)と歩行に対する満足度との関連性に関する研究³⁾や、竹嶋(1993)における外出の頻度を基に高齢者に好ましい居住地を検討する研究においても当てはまると言えるだろう。

その他の外出行動に関する研究としては、在宅高齢者の外出形態の構造を探索する研究(例えば、仙田、1993; 権野・中村・木下、1999; 松本、2004)が挙げられる。それらの知見の中で、松本(2004)は在宅高齢者の外出の形態を検討するために、自由記述アンケート調査を行い、外出時の目的地とともに目的地間の行為(「立ち寄り」行為)を尋ねている。松本(2004)は、目的地と立ち寄り行為の関係を考察する中で、リタイヤ後の外出の形態は目的地だけ、つまり点と点だけで成り立っているのではなく、立ち寄りを含めた行為の連続、つまり線として成り立っていることを指摘し、リタイヤ後の生活を理解する上で、外出時の点と点の間に連なっている進行中の行為をより精緻に理解する必要があるとしている。

(2) 環境体験に関する研究知見：行為／体験への注目

外へ出ることを理解する方向性の一つとして、外出時に人はどのような行為をし、どのような体験を享受しているのか注目すべきであると考えられる。外出時の行為／体験を明らかにする上で、示唆的であるのは環境老年学における環境体験(environmental experience)に関する研究知見である。

Rowles(1978a)は「高齢者に関するさらなる研究として体験の側面から彼らの環境との関係を探索する必要がある」と述べ、さらに「高齢者の生活世界、具体的には価値や意味、そして日々の体験に浸透する志向性を探究する必要がある」(Rowles, 1980)とし、「環境体験とは、彼らが生活をする空間や場所の内部でのかかわり(involvement)と定義する」(Rowles, 1978a)としている。また、松本(2005a)において「当人においては日々当たり前前に重ねられ、かつ瞬間瞬間に流れ去っていく(この体験)、さらに日々当たり前前に取り囲まれている物理的・社会的環境に出会う

〈この体験〉をここでは環境体験としている。また、彼／彼女に現れた環境体験を一般的な構成概念等に押し込めるのではなく、〈この体験〉そのものを大切に理解することを求めている」と述べている。まとめると、環境体験に注目する研究は、高齢者の生活世界内部における意味や価値にかかわっていて、かつ日々当たり前に取り囲まれている物理的・社会的環境に出会う〈この体験〉を掬い取ることから探索していこうとする指向性を持っていると言えるだろう。

これまで高齢者の環境体験を扱った研究知見として、Rowles (1978a, 1978b) は、年を重ねると身近なものへの愛着が増すことにより地理的生活空間が縮小するという根強いイメージの流布に関して再考を行っている。具体的には、Inner-city に居住する5人の高齢者の日常生活における環境体験について、積極的参加者(enlisting participants)としてRowles自身の体験を含み込んだ理解を試みている⁴⁾。Rowles (1978a, 1978b) が協力者の生活世界内における環境体験を記述する上で、特に、今日の前に広がる環境セッティング内での身体的・認知的関与(例えば、エバリンが家の窓から見渡せる限りの狭い範囲を優しく見守っていること)だけでなく、「ファンタジー(fantasy)」と名づける時間的かつ／あるいは空間的に遠く離れた環境についての代償行為に注目している。ファンタジーとは、遠くにいる親戚・友人の世界、もしくは過去の出来事に参入することにおいて、「過去の場所」と「場所のない現在のロケーション」の代償的浸透(vicarious immersion)を意味するとされる。例えば、マリーがフロリダに居た時代を振り返ることや娘の生活世界に想いを馳せること、レイモンドがAr-kansasにある庭のことを考えたり、遠く東京に滞在する息子を東京時間に合わせた時計を見ながら想うこと、などが示されている。

Rowles (1980) においては、Appalachia 山岳地帯にあるColton 地区に住む高齢者の生活に3年間ほど付き合いながら、高齢者の日々の環境体験、特にColton という“この場所”に関する探索を行っている。Rowles (1980) は、体験的フィールドワークから見出された場所に関する“内側性(insideness)” (Relph, 1976/1999) に関して議論がなされている。ここでは、この場所(Colton)の内側から“離れることをためら

うこと”、“内側にいること”、“外へ出て行くこと”、“内側に戻ってくること”といった事象に関して、具体的なエピソードを基に検討が行われている。

また、松本(2005b, 2005c) は在宅高齢者の外出行動に注目している。実際の外出に同行し、著者(同行者)自身の体験を通してエピソード(外出時に起こっていること)を描き出した。さらにエピソードについて著者の解釈を提示して、外出することに関して検討を行った。松本(2005c)においては、高齢者の生活における外出することの意味と価値を表す上で“包含”という言葉を提案し、「今・ここ」で体験が連続していくこと、つまり様々な環境との出会いが重なっていく体験を、行為者の所有するもの(経験)として含意していく過程として外出を位置づけている。松本(2005b)では、松本(2005c)で示した外出することの意味と価値を理解する経路である“包含”という言葉の含みうる範囲を探索する中で、外出時において生成する今・この行為/体験を取り巻く機制としてルール、ルーチン、持続、そして選択という言葉が提示した。そして、リタイヤ後の生活では外出する機会が日々当たり前に訪れてこないことを指摘し、外へ出て否応なく自宅とは異なるルールに取り囲まれ(包まれ)、外で起こった過去経験の持続が介在する「今・ここ」での行為/体験の機会が失われることを外出と高齢者の生活との関係として明らかにしている。これらの機会が失われることは必然的に「私」を形づくる経験の総体の脆弱化、もしくは「私」を取り巻く意味世界の空疎化に繋がるのではないかと結語した。

このように、高齢者の日常生活における“内(家)と外”に関する探究が環境体験研究において行われてきている。また、これら環境体験の研究知見に共通するのは、人と彼／彼女らを取り巻く環境を切り離せない「相互浸透関係(transaction)」(Ittelson, Proshansky, Rivlin, & Winkel, 1974; Altman & Rogoff, 1987)として理解し、その一体である高齢者と環境を描き出す界面として行為や体験に注目している点である。

著者は、高齢者が居住する特別養護老人ホームに通い、主に入居者と施設内外とともに時間を過ごすかわりを約3年重ねていた。そのようなフィールドワークを通して、施設とはどのような場所であるのか、施設環境において高齢者の日々の生活はどのように営ま

れているのか、著者が施設環境においてどのように入居者とかわり、そのかわりの中でどのような事柄を主題として見出しているのか。具体的な入居者の生活の様相を、施設内外における行為や体験を通して描き出し示すことにより、まずは「外へ出ること」という主題の内実を読者に了解いただくことが本研究の具体的な課題である。

方法

フィールドワークの概略

(1) フィールドの概略

a) 対象フィールド 福岡市内の特別養護老人ホームM(5階建)の2階、身体の障害を抱えた方が多いフロアに通っていた。この施設は、1階にデイサービスがあり、3階は認知症を抱える方が多いフロアと個室の方のフロアが仕切られて併設されている。4・5階はケアハウスとなっている。なお、2階にはショートステイ(短期入所)の数人を含め、約40人の高齢者が常時入居している。入居者は、近隣に住んでいた方が多数であるが、家族が福岡に住んでいるという理由で県外から入居される方もいる。

b) 通所開始時期と通所頻度 平成14年8月(施設開所の直後)から平成17年9月末まで著者の異動により福岡を離れるまで通っていた。開所から初めの約半年は週に2日(徐々に火・金曜日へと固定していった)、その後は週に1日(金曜日)通っていた。出来る限り、週に1回は通うようにしていた。

c) 滞在時間 基本は、午前10時半から午後4時半まで。時間帯が前後することはあった。

d) 滞在日・滞在時間に施設で行われていること 開所当時から徐々に変化している。大きな流れとして、午前10時半過ぎから体操及び合唱、12時前から昼食、14時半前から体操及び合唱、15時からおやつとなっていた。これらの時間前後には、フロア⇄居室間の移動が必要なため、移乗及び移動の介助が必要となる。また、これら以外にも、共有スペースや居室の清掃、洗濯、ベッドのシーツ交換、排泄介助、リハビリ、介

護／看護記録などが行われていた。

(2) フィールドの特徴：外出にまつわる事柄に関して

- ・多くの入居者において、家族や職員が外へ連れ出さない限り、365日24時間施設内にいることになる。よって、家族がいない場合、職員だけが(外へ出る上での)頼りとなるのが現状である。なお、心身の不安があまりないケアハウスの入居者は1人で外へ出て行くためこの限りではない。

- ・家族が定期的に通ってくる入居者はそれほど多くない。しかし、夫、妻、親、そして息子・娘の世話をするために、日常通ってこられる人も少数ながらいた。

- ・職員が入居者と業務内で施設外へと出るのは、季節ごとのイベント(例えば、お花見、紅葉散策、遠足)や買い物に出かける時、それから病院に行く時であった。なお、施設の敷地内に駐車場を兼ねた「オープンスペース」がある。気候条件にもよるが、そこに職員が入居者を連れ出すことはそれほど見られなかった。

- ・施設内のイベントは、季節の行事ごと(例えば、クリスマス会、忘年会、夏祭り)に開かれていた。地域の方が踊りを見せに訪れたり、職員が芸を披露したりしている。入居者が歌を披露することもあった。

- ・施設のスケジュールが優先されるため、個々人の要望に応えることが可能な状況にはあまりなかった。仮に、施設が個々人の要望を受け入れられたとして、具体的に外出できるのは、職員のスケジュールに外出の予定を組み込んだ後、数日後もしくは数週間後となるのが現状であった。

- ・施設Mでは、入居者それぞれの担当職員が決まっている。入居者の要望を聞くことや家族との窓口になるのは基本的に担当職員である。

- ・著者は、複数の入居者から施設外へ行く外出の要望を度々訴えられ、それを受けて施設側に掛け合ったことがある。結果的には、入居者の安全確保(仮に著者が一緒に外出するとして、著者は責任を取れる立場にない)、集団性の優先(例えば、1人だけ特別扱いには出来ない)、外出理由の問題性(例えば、カロリー制限の必要な人が食べ物を買いに行くこと)を主な理由として実現していない。なお、前述したように、職員においても、スケジュールに組み込まれた範囲内で

要望に応えることが可能である。

(3) フィールドにおける著者の立ち振る舞い

a) **これまでの経過** 開所当初著者は施設へ頻繁に通い、介護の補助に走り回っていた。具体的には、食事介助・トイレ介助・移乗介助・掃除などを行っていた。ただし、著者が職員と同様の業務を強いられるようなことはなかった。あくまでも、職員の手がまわらないところの手助けをしていたと著者は理解している。施設の体制が整うことと連動して、徐々に著者が業務を手伝うことは減っていった。著者のことを職員らしき存在と思っている入居者もいれば、職員とは違った存在だけれども定期的に通ってくる人と理解している方もいた。開所当初よく尋ねられていた著者が何者であるかを、時間とともに新しく入ってきた入居者・職員からは尋ねられなくなった。

b) **経過した後の立ち振る舞い** 食事介助や掃除は継続して行い、人手が足りない時や入居者から直接頼まれた時に限ってトイレ介助・移乗等を著者の出来る範囲で行っていた。むしろ、家族も含めて入居者とおしゃべりをしたり、入居者と一緒に外へ散歩に出たりといったことが著者の中心的な活動になっていった。

c) **フィールドメモとフィールドノート** 著者はフィールドワーク中、常に小さなメモ帳を携帯していた。逐一メモをとることはしなかったが、特に何もしていない時や自主的にとる休憩時間などを利用して関心のあった出来事をフロアや休憩室にてメモをした。なお、著者において惹きつけられた事象を、体験した後には覚えておこうと反芻することはあった。しかし、その場での発話の内容や、場のニュアンスを忘れてしまうことはしばしばであった。

著者はフィールドノーツを当日作成するように努めたが、数日かかって作成することもあった。いずれにしても、フィールドでの体験の余韻が残っている間にノーツを作成することを心がけた。諸事情により時間が経った後に作成したノーツもあるが、そのノーツに描かれたエピソードは臨場感に欠けているように著者は感じている。なお、本論において提示するエピソードは、基本的にフィールドノーツに描かれているエピソードの体裁を整えたものである。具体的には、文章の前後のつながりを見直したり、公表する必要がない

と思われたプライバシーに関わる記述を削除するなど行った。

結果と考察

具体的なエピソードと解釈の提示

ここからは、施設環境において著者が入居者と外出をした経験の中から3つの外出に関して提示する。外出した前後を含めて、外出時に著者において出会われた事象(エピソード)を出来るだけ切り刻まずに描き出ししていく。併せてその場に居合わせた著者の経験を通じた事象理解を示していく。外へ出ることにおいて、施設環境にはどのような事象が潜在しているのか描き出し示すことを本論の課題としたい。

エピソード1 塚本さんとの散歩に進藤さんがついてくる 平成15年5月のある日 天気：晴れ(風が強い)

午後1時半ぐらいにはやることができなくなり、なおかつ外はとても晴れているので誰かと外へ行きたいなと私は考えた。そこで最近誘っていない塚本さん(女性、当時79歳)の居室を訪れ、散歩に誘ってみた。

塚本さんが行くと言うので、トイレを一旦済ませて車イスに移乗しエレベーター方向へ車イスを進めていった。すると、エレベーター前に進藤さん(女性、当時85歳)が待ち構えるようにして佇んでいた。私は少し困った気持ちになりつつ、近づいていくと案の定進藤さんが声を掛けてきた。「1階に行くの?」「一緒に連れてって」と頼まれる。私は進藤さんが「家に帰る」と言いだすと困るため、「進藤さん、外行くんでしょう?」と確かめると、「いや、あんたについていだけやから」と話される。私は、進藤さんの意図を掴みかねていた。今塚本さんを外へお連れしようとしているのだから、進藤さんの頼みを断る理由はどこにもない。しかし、進藤さんが(オープンスペースを出て)施設の外へ行くと言いださないと限らない。普段進藤さんは自宅へ帰りたい旨をよく口にしている、今言っていること(「施設の外へは行かない」)への変節が私には理解できなかった。ま

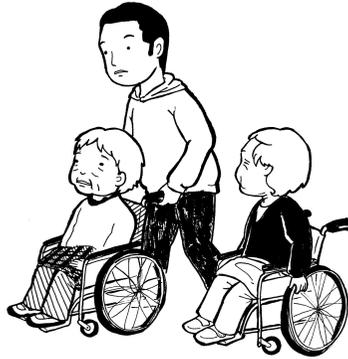


図1 エピソード1のイメージ図

た、どこでもいいから私について行きたいと進藤さんが言ったことはこれまでなかったし、進藤さんがこのようなことを他の人に言っているの聞いたこともなかった。

望みを叶えたいけれど、大丈夫なのか迷いがあったので、とりあえずサービスステーション前テーブルにいた介護職員（以下、職員）の関口さんに尋ねてみた。関口さんは、「よかったらよろしくお願いします」とあっさり返される。あっさり過ぎて私は困ってしまう。「家に帰ると言うかも」と再度投げ掛けると、「その時はバスがないとでも言ってください」とサラッと返された。まあそんなものかと少し肩透かしにでもあった感じがしたが、とにかく進藤さんに外へ一緒に行くことを承諾する旨を伝えた。すると進藤さんは喜び勇んで、率先して自分で車イスを進めてエレベーターに乗りこんだ。エレベーターの中で、「私はずっと同じところにいるのは前からキレイなのよ」とはっきりとした強い口調で、2、3度繰り返された。進藤さんは、このような“私は前から～だった”という言い回しで話されることが多いが、同じところにいることが前からキレイだったことは私には初耳であった。

進藤さんはエレベーターで1階に降りたところで、ここはどこなのか尋ねてきた。また、受付前の玄関ホールでも物珍しそうに視線を動かしていた。そして、いくらかの質問を私にした。さらに、玄関先に敷かれている点字ブロックの上に車イスが乗ってしまい、思うとおり進まないのが楽しいようで、進藤さんはケラケラ笑っていた⁶⁾。

外へ出て、マンションの建設工事が行われているサイドへ行き、とりあえず落ちつくると、進藤さ

んは「やっぱりいいね外は」と話された。「外の空気は違う」とも話される。

また、背中越しに工事をしていることについて、「白いのがチラチラ見えると思ったら……アハハ」と驚き楽しんでた。「白いの」とは、マンション建設工事のため白い薄いボードが柵に張ってあるので、工事をしている人の白い像だけが動いているように見えたのである。

建設中のマンションを指して、「ここも大きいね」と話してもいた。その他にも、いろんなものに驚き、それが何であるのか私に尋ねてきた。

特に、今出てきた玄関の方向を「あっちが玄関？」と確かめているような、たんに知りただけのような、どちらともとれる感じで繰り返し私に尋ねてきた。

それから特別養護老人ホームが入っている建物の上の階を指して、「この上は人に貸しているの？」と尋ねられた。このことも繰り返し尋ねられたが、私にはケアハウスと特養の違いを分かりやすく説明することが難しかったため、「貸している」と応えてしまう。こういった質問を進藤さんのハリのある声で続けざまに投げかけられると、横で塚本さんも何か話してはいるのだが声がかき消されてしまい、進藤さんの質問にどうしても引っ張られることが多くなる。出来るだけ塚本さんの問いかけに答えるようにしていたのだが。

その他に、食材運搬のトラックがやってきて、目の前を通り過ぎた時に2人とも目を見張ってそちらを見ていた。塚本さんはそのトラックがすぐに出て行くのではないかと、少しよけた方がいいのではないかと少し急くように2度ほどこちらに訴える。今は積荷を降ろしているだけで車は動かな

いたため急がなくていい、と私は塚本さんに伝え、一応納得してもらった。

ところで、今いるサイドは、建物の形状の関係で通路が傾斜している。その為、進藤さんがいつも（室内）の感覚で車イスをこぐと斜めに滑っていったうまくこげない。また、いつもだったら床が水平なためブレーキをかけずとも車イスが動くことはないが、ここでは車イスが独りで後に後ろへ下がっていく。進藤さんはいつもの感覚でいるため、私が気をつけて、車イスを後ろで支えたり、ブレーキをかけたりしていた。進藤さんはそういったいつもの感覚ではうまくいかない時や、知らず知らずに車イスが動いて私が止めた時に、とても楽しそうに笑っていた。その後も、表情はともも明るかった。この変化を文章に表現しきれないのはもどかしいが、先ほどまでの望みが叶えられないなんとも寂しげな顔と比較すると大きな差であるように思えた。進藤さんの顔はもともと明るい顔ではあるが、パッと明るい表情に変わったと私には感じられた。

日なたは暖かいのだが、はじめからいたサイドが全体的に建物の陰になってきて、寒くなってきた。そこで逆側の庭に行きましょうかと声をかけ、お2人とも了解されたので玄関前を通って逆のサイドへ行こうと進んでいった。すると、ビル風の種類だろう、玄関前は風が強く吹いていた。塚本さんが「風が強い」「帰ろう」と言い始めた。初め私は、逆のサイドへ行くと日が当たって暖かいからと論じていたのだが、塚本さんが再度「風が強い」「帰ろう」「風邪を引く」と言って、進藤さんも同じように訴えたので、私としては致し方なく建物の中に入った。逆のサイドまで、あと5mぐらいの距離しかないのだが、無理をしてまで行くことでもないのだろう。少しの距離ではあるが、そこまで行くのが大変だと判断したようである。

1階の廊下を通って、エレベーターに乗り2階へと上がって行ったのだが、その道程においても「ここはどこ？」と進藤さんは私に尋ねていた。2階に着いても、「ここは？」と独り言のように話していた。進藤さんはしばらくして、ここが自分のいつもいる場所であることを呑み込めたようだった。

さらに進藤さんの興奮ぶりはしばらく続いた。後に、塚本さんを居室へ横になるためにお連れして、ベッドへ移乗していると、居室のカーテンが突然引かれた。振り向くとそこには進藤さんがいた。進藤さんは「ここにおったとね」と笑顔で言

った後、さっきのお礼を言って、すぐに去っていった。塚本さんの部屋は建物の一番端にある。わざわざお礼だけを言い、遠くまで車イスを押して来たことに私は驚いた。

これは、塚本さんを誘った散歩に進藤さんがついてきたエピソードである。本エピソードにおいて生起していると著者に思われた行為や体験を以下に示していく。

(1) 外出の準備および外出を終えた後に生成する行為/体験

まず、進藤さんが私たちについていくことになり、エレベーター内で「同じところにいるのが前からキラリ」とハッキリ発していた。この言葉の真意はともかく、同じ場所に居続ける中では上記の言葉を発する機会は訪れてこないのではなかろうか。

次に、1階へ降りる道程および2階へ帰る道程において、進藤さんは今いる場所がどこであるのか度々尋ね、さらに物珍しそうに周囲の環境を眺めていた。これは進藤さんの見当識が幾分怪しいこと（日時や場所、そして相手が誰であるのかという認識はほぼ失くしている）が関連しているだろう。しかし見当識が怪しいからこそ、今・ここの新鮮な体験を得ることが出来、この瞬間この場所を楽しめていると考えることが出来るのではなかろうか。そして、記憶が留まらないからこそ、今・ここの新鮮な体験を続ける必要があるように私には思われる。また、2階へ戻った時、進藤さんはいつも居慣れたこの場所がどこであるのかしばらく把握できていなかった。多くの人においても、家（内）に長く居続けた後、外へ出て改めて家（内）に帰ると、外出する前に比べ家（内）が新鮮に感じられるだろう。進藤さんにおいても、先ほどまで居慣れていた場所が新鮮さをもって体験されているように私には思われた。このように外へ出ることは、居慣れない新鮮な場所を体験することであり、また居慣れた場所が新鮮に体験されることでもある。

散歩をした後に、進藤さんがわざわざ塚本さんの部屋までお礼を言いに来た。これは外出という体験を経たからこそ出現した行為である。彼女にはお礼という理由がある。つまり、そのような行為を外出することは可能にしていると理解できるだろう。

(2) 外出時に生成する行為／体験

まず、室内から室外へ出る過程で、質感の異なる空気に取り囲まれ、風を身体で浴びることに注目する。エピソード1において、進藤さんが「空気が違う」と話された。また、玄関前で強い風に吹きつけられていた。室内から外へ出ていく時多くの方が漏らす感想が「空気が違う」ことである。我々は、どの場所においても均質化された空気に囲まれ、いつも同じ風を受けているだろうか。場所を変える、特に内から外へ出ることは、取り巻く空気や吹きつける風に変化を求めているということではなからうか。

次に、進藤さんにおいて、外へ出たときに不安だったのか、もしくはたんに関心があったのか、玄関の方向を何度も尋ねていた。また、その他にもいろいろと私に尋ねてきていた。このように、ある状況に取り囲まれることにより、もしくは環境に出会うことと同期して尋ねるといった行為や尋ねずにはいられないという体験が生成するように私には思われた。室内では、何かを尋ねる機会がそれほど潜在していないように思われる。

進藤さんが施設周りでやっている工事現場に興味を示していた。多くの人たちにおいては、外で普段何気なく様々な環境に出会い続け、日々環境の変化を体験している。しかし、進藤さんの言動に表れているように、施設の周りにある環境（工事現場、マンション）さえも入居者は日常出会うわけではない。このように外へ出るだけで、様々な環境の動きが感じとられている。また、塚本さんがすぐにトラックが戻ってくるのではないかと怖がり、早く場所を変えようとせつづいていた。これは塚本さんの視力が極度に弱いため、トラックが今どのような状態にいるのか分からないため早く動こうと訴えた面はある。ただ、そのような何かよく分からない畏怖するものに出会うことは、窓越しに環境を眺めるのではなく、外へ出て自分の身を晒すことにおいて生起しうる体験ではないかと私は考える。このように、実際に外へ出て出会う環境は様々である。

進藤さんが自分のいつもいる建物を外から眺めていたことが記述されている。施設環境では、入居者は施設内にほとんど留まっているため、いつもいる場所を

含めて自分を振り返ったりはしないように思われる。自分がいつもいる場所から脱け出し、改めて外から自分のいる場所を眺めてみることは私たちの生活世界において不可欠な過程ではないだろうか。進藤さんが自分のいつもいる建物を外から眺めてみることは、自分の存在を自覚するという有意義な体験であると私は理解した。

進藤さんは点字ブロックに車イスを乗り上げてしまし、ままならない感じを楽しそうに笑っていたり、道路が傾いているために車イスがいつの間にか動いてしまうことではしゃいでいた。室内では味わえない身体感覚を得る機会が外には潜在しているように思われる。特に施設環境では、室内の物理的バリアをなくし、車イスに乗る入居者や足腰が弱っている入居者の移動においてできる限り不自由のないように配慮されている。物理的バリアをなくすことは多くの入居者にとって移動の可能性を開き、行為や体験の可能性を開くだろう。しかし、物理的バリアは行為や体験の機会を提供することもある。進藤さんにおいては、外へ出て物理的バリアに出会い行為や体験を享受していたように私には思われた。

(3) 同伴者の存在

このエピソードは、私が入居者とオープンスペースへ散歩に行くようになり半年ほど経った頃記されたものである。エピソードから、後に示すエピソード2に比べ、外へ出て行く／出た時の私には依然硬さが読み取れるのではなからうか。具体的には、進藤さんと外へ行くことに躊躇がある。また、一緒に外へ出た進藤さんと塚本さんと私、3人の間に活発なやりとりがあまり生起していない。これらのことは、私自身が散歩に入居者を連れ出すことにまだまだ慣れていないことを表しており、さらに、入居者にとっても外へ出ることが度々起こっている事象ではないことを示しているようにも思われる。一方で、このエピソードを読むと、誰とであれ、ただ外へ出るだけで様々な行為や体験が生起していることを読み取れるのではなからうか。

エピソード2 3ヶ月ぶりの阿部さんとの散歩 平成16年12月のある日 天気：晴れ

今日一番のエピソード、阿部さん（女性、当時

68歳)と散歩に行った話である。

午後の体操と歌が終わり、入居者はおやつを食べていた。その中で、杉下さんが食べていなかったの、私は介助をするために彼女へ近づいていた。すると、後で思うと杉下さんは寝ていたの、だろう、“ガクッ”と突然崩れ落ちた。おやつのゼリーを手にしにかけていた私はビックリして飛び上がった。体ごと飛び上がった感じがするぐらいビックリした。その姿を見ていた同じテーブルにいた阿部さん(阿部さんの視線の真向かいに私はいた)は、ガラガラと大笑いをしていた。私の驚く姿が面白かったの、だろう。あんなに笑っている阿部さんを私は見たことがなかった。腹の底から笑っているように感じた。なかなか笑いが止まらない。私も阿部さんがあんな嬉しそうに笑うものだから少し嬉しくなり、目を合わせて笑い合った。

そのめったにない時間をしばらく過ごした後、阿部さんにたまには外へ行かないかと誘ってみる。すると、「行ってみようかね」と了解される。私は「阿部さんが行くなんて言うのは珍しい。早速行きましょう」と言いながら、杉下さんの食事介助を早々に済ませて阿部さんと外へ出ようとしていた。

すると、職員の浅井さんが「トイレに行って部屋へ戻りましょうか?」と阿部さんに声を掛けてきた。それに対して、阿部さんは「今から散歩に行く」と明確に意思表示をしていた。浅井さんは少し表情を緩めて、了解をして、その場を立ち去った。阿部さんは行く気である。

ところが、阿部さんの乗っていた車イスの片側がパンクをしていた。試しに空気を入れてみるがやはり空気が抜けるので、どうしたものかと思案していた。いろいろと私が作業をしている最中阿部さんは、今日は他に誰が散歩に行ったのかと私に尋ねてきた。気になるの、だろう⁷⁾。今日は、すでに小森さんと森岡さんと外へ行き、いつもは4人ほどの人と一緒に散歩へ行くことを伝える。それを聞いた阿部さんは、ふ〜んといった曖昧な反応であった。一方で、問題のあったタイヤの空気栓を、阿部さんが乗ったままで換えてしまおうと私が提案すると、「車イスを代えればいい。あっちに車イスがある」とBホールの端を阿部さんは指していた。少しせつっている様に感じられた。

Bホールの端へ車イスを交換しに行き、エレベーターのあるAホールへと戻ってきている途中、フロアの中央にあるサービスステーションを挟んで阿部さんの居室の逆サイドを通るのだが、阿部さ

んは「こっちは明るいね〜」と初めて通ったかのように話される。こちら側はマンションに遮られていないからではないかと私は返した。こちら側を通るのが初めてなのか私には分からないが、自力ではちょっとずつしか車イスを進めることのできない阿部さんにとって、こちらのサイドへ来るには人の介助が必要である。彼女は基本的に寝ていることが多いため、食堂と阿部さんの居室のあるサイドとの往復をすることが日常である。このフロアの世界すべてさえ知らないことに気づく。

今日は、少し肌寒さを感じさせたのだが、外へ出て「少し肌寒いですね」と私が声をかけると、阿部さんは「そんなことはない」とぶっきらぼうに返してきた。

外へ出る直前に私がいつ以来の外出か尋ねると、私も同行した先日(一月半前)のジャスコへの買物以来の外出だと話していた。

外へ出て、阿部さんがまず注目して声を上げたのは、隣の家の庭になっていたみかんであった。「みかんがなっとうよ」と話される。私は阿部さんと施設のある敷地から少しだけ外へ出て、近寄れるところまで近づいてみた。その時に、施設に隣接するいくつかの家の庭に山茶花が咲いていることに気づいて、2人でそのことを話していた。施設のある敷地へ帰ろうとすると、施設前の道路のカーブに立っているはずのオレンジ色した車用ミラーが倒れていた。「倒れていますよ」と私は阿部さんに声をかけ、彼女も興味津々見ていると、作業着姿の男性の乗った特殊車両がやってきて、そのミラーを直そうと作業を始めた。「また、タイミングのいい時に来ましたね〜」などと私が話しながら車イスを押し、施設のある敷地へ戻っていった。施設のある敷地に戻ると、施設の花壇に水仙が咲いていて、「水仙ですね」なんて私が話す。さらに、阿部さんが水仙の先にある柵から見える隣の庭を指して、「山茶花が咲いとうね。白い山茶花も咲いとう」と話される。私からは見えていなくて、もう一度阿部さんに教えてもらおうと確かに白い山茶花らしき花が赤い山茶花の横に咲いていた。私は感心して「白い山茶花ってのはじめてみましたよ」と言うと、阿部さんも「私もはじめて」と返してきた。

さらに職員用の駐車場が設けられているサイドを進んで行くと、(彼女の恒例行事なのだが)阿部さんは、「この車は新しいね」、「どの車もきれいにしているね」、「この車は外車のようにしゃれている」、「座席の位置が高いね」、「最近はみんなりっ



図2 エピソード2のイメージ図

ばな車に乗っているね」,「どの車も大きいね」など1台1台興味を持って眺め話していた。

それから、施設の建物を挟んで逆サイドの敷地へと向かい、奥のほうに進んでいくと、阿部さんは左手に並ぶ鉢植えなどには目もくれず、右手に建つ施設の1階に設けられているデイサービスや正面に立つマンションに関心を向けていた。阿部さんは背筋を伸ばした姿勢のためか、足元などには視線がいかず心持ち上の方に視線がいつている。そして唐突に、「(あのマンションの)～が取れてる！」と驚いた様子で話される。～とは、聞き取れなかったのだが、いわゆる改修工事の時にかぶせてある幌のようなものである⁸⁾。一緒にしばらく見ていたのだが、外壁の色が塗りなおしてあったのを指して、阿部さんは「ハイカラやね～」と感嘆していた。私は、「ハイカラですか～」と意地悪く笑いながら阿部さんをからかった。阿部さんは私の投げかけのニュアンスを解した上で、苦笑いしていた。

玄関の方へ引き返してくると、右手に新幹線が通っていった。新幹線が通っていることを私が伝えたと、阿部さんは体をそちらによじらせた。「あれはのぞみですから、東京まで行くんですよ」と私が話すと、彼女は「東京には20歳(はたち)の時行ったきり」「一人身の時に行ったきり」と話される。私は「20歳というと50年前ですか!」と驚くと、阿部さんは「20歳、20代かな」と少し言葉をにがらせた。いずれにしても、半世紀ほど前の出来事である。私は、阿部さんが新幹線を見て半世紀前の出来事に思いをめぐらせていることに感

じるものがあった。

そして、玄関から建物内に入り、2階に戻るためにエレベーターホール方面へ進んでいた。すると、阿部さんが体を後ろの方にひねり「あそこ、あそこがみたい」と飲物の自販機を指差した。どうも自販機という言葉が出てこなかったようだが、そちらへ戻ってくれと頼まれる。話を聞いていると、いつも娘さんがここで飲み物を買ってくるらしい。それ(娘がいつも買う自販機)がどんなものであるのかを知りたいということのようである。自販機は2台並んでいるが、右手のバックのジュースを売っている機械の前にまずは車イスを止め向き合い、「ふへん、オール100円なんやね～」と話される。この「オール」という言葉が阿部さんには似つかわしくないように感じられ、私には面白かった。「コーヒーも2種類あって……」と話される。私は、上からコーヒー、紅茶、野菜ジュース、オレンジ、グレープフルーツ、ミックスジュースと説明をしていった。阿部さんは「野菜ジュースもあるったいね」と感心される。

そして、隣の自販機へと移って、「お茶もあるったいね～」、「あっ!ビールもある」と楽しそうにこちらに伝えてきた。その他にも、「ホットはこれだけ(5,6種類)しかないのか、あとは全部冷たいのか」といったことを話していた。

2階に戻って、職員の木村さんから「寒くなかったですか」と尋ねられ、阿部さんは「寒くない」と応えていた。その反応に対して木村さんは、「結構寒いけど」と一人ごちていたが、阿部さんにとっては寒さを感じるよりむしろ楽しさや物珍しさ

が先に来ていたように私には思われた。

居室に戻り、阿部さんのトイレとベッドへの移乗をしたのだが、阿部さんは終始機嫌がよかった。

このエピソードは、阿部さんと2人で外のオープンスペースへ出て行った時の様子を記述したものである⁹⁾。このエピソードで生成していたと私に思われた事象理解を以下に示していく。

(1) 外出の準備および外出を終えた後に生成する行為/体験

外へ出る前に、阿部さんは彼女が乗っていた車イスのパンクを修理しようとしている私に、外へ早く行こうとせっついてきた。また、私と外へ行くことを職員さんに明確に伝えたり、外から帰ってきた後「寒くなかったですか?」と尋ねる職員に対し「寒くない」と明確に意思表示をしていた。施設における行為は、その多くが他律的なもので、上記のような能動的な行為は施設においてそれほど見られるものではないように私には思われる。その中で、外へ出るということは入居者において自ずから積極的になる機会になりえるのではなかろうか。

それから、車イスを交換するため、阿部さんがいつも食事をとる A ホールではない B ホールへ行くことがあった。その時、阿部さんは初めてそこへ行ったような反応を示した。外出とは通常、室外へ出て行くことを想定するが、阿部さんにとって知らない場所と出会い新奇な体験をしているということで、B ホールへ行くことは外出に準ずる体験ではないかと私は理解している。ところで、多くの人において家(内)の中がどのようになっているのかは大体知られているだろう。一方で、阿部さんが見せたように、入居者においては施設内に知らない場所が存在する。このことから、「施設環境は内(家)なのか?」と問いかけることが可能であるように思われる。この内(家)―外の分節は、今後さらに探究する必要があるだろう。

その他に、外へ出る直前に、前回外出したことが話題になった。これは、今から外へ行くという場面だからこそ「この前はどこへ行ったのか?」と話題に上ったのではないかと私は理解した。

(2) 外出時に生成する行為/体験

阿部さんは外へ出て、みかんに関心を示したり、花を柵越しに眺めたり、立っているはずの倒れたミラーを見たり、職員さんの車を見たりしていた。それから、1階に設けられているデイサービスの部屋は建物内からも見る事が出来るが、この時阿部さんは外から眺めている。これらは室内では出会えない環境であり、阿部さんはそれぞれ興味を示していた。次に、前回外へ出た時にはまだ工事中であったマンションの改修工事がすでに終わっていた。阿部さんは、工事が終わってしまっている環境の変化を目の当たりにして驚いた様子であった。そのような一変する環境の変化に出会うことは、いつも居る場所ではなく、たまに来る場所だからこそ体験し得ることではないかと私は考えた。さらに、自動販売機でビールが売られていることを指して、嬉しそうに私に話しかけたことを記述している。施設内でお酒を飲むことはほとんどないため、施設内でビールを目にすることは想像し難いものである。そういったいけないものを見つけて、はしゃいでいるように私には感じられた。これらのエピソードは、それぞれ室内では出会えない環境と出会うことにより、興味を示したり、驚いたりはしゃいだりといった行為や体験が生成していることを示しているように私には思われた。

私が近くにある線路を指して新幹線が通過していることを阿部さんに伝えると、新幹線を見るために身をよじることがあった。阿部さんの部屋からは、隣のマンションにより視界が遮られているため新幹線が全く見えない。後の記述に表れているように、阿部さんは車に関心を示している。また、他の日の出来事であるが、飛行機が上空を通過している時に関心を示していた。乗物に関心が強いいためか、普段部屋からは見られないためか、それとも過去に新幹線にまつわる経験があるためか、いずれの理由か一つに特定は出来ないだろう。いやむしろここでは、いずれかの理由が因果的に身をよじらせた行為を引き起こしたと理解するのではなく、身をよじらせて新幹線に関心を示した行為そのものが意味的であり、その行為の実現したことが自ずと上述の阿部さんの抱える様々な背景を語っているように私には思われた。

同じ新幹線を眺めていた時に、阿部さんは 50 年前

に東京へ行ったことを思い出していた。このように過去の出来事を想起することは、ふとした環境との出会いにおいて、思い出されてしまうように私には感じられる。意図的に思い出そうとしているわけではない、回想法のように過去を想起するきっかけを用意・提供し、参加者はそれに反応するという構造とも異なっているのではなかろうか。外出時において、いつどこで何が思い出されてしまうのかは本人には予想し得ない。想起とはこの時この場所を含めた現在の行為として生成していると私は理解した。

このエピソードが記された時まで阿部さんにとっては、娘さんが購入しているであろう自販機という間接的で不確かな情報であったのが、この時確信を持った直接的な情報へと変化している。このように私が理解したのは、その後の外出において阿部さんは、何度も自販機に関心を寄せ、娘さんがいつも買ってくるコーヒーがまだ残っているか確認していたからである。つまりこの日以降、阿部さんはこの自販機に娘さんがいつも買ってくる「あのコーヒー」が入っていることを知っていた。よって、この自販機に「あのコーヒー」が入っていることを知ったのはエピソードに示されている「この時」であったと私は推測した。

(3) 同伴者の存在

外出することにおいて、同伴者である私の存在が阿部さんにおける行為や体験の機会の生成を助けているように私には思われた。話す相手がいるから話すのであり、相手がいるから何かを見つけた時笑いかけるのであり、何かを発見した時教える相手がいるから楽しさが増すのではなかろうか。また、本フィールドワークの特徴であるが、必ずしも同伴者である私は聞き役だけに徹していない。阿部さんの問いかけに返答したり、話題を提供したり、時には阿部さんを茶化したりするような、私からの投げかけにより行為や体験が当たり前のように生起する。外へ出ることでなく、同伴者がいることにより阿部さんにおいて享受される行為や体験は異なってくると私は理解している。ところで、このエピソードは平成16年12月に記されたものである。エピソード1(平成15年5月)に比べ、会話が弾んでいることが伝わるのではなかろうか。そして、2人がよりリラックスした雰囲気の中で散歩を

していることが感じ取られるのではなかろうか。入居者と同伴者である私が散歩を重ねることにより事象そのものが変容していくことが、本エピソードに現れているように思われる。

エピソード3 末広さんにとっての外へ出ること 平成16年7月のある日 天気：晴れ(猛暑)

帰りしな職員の君塚さんとの話の中で話題にのぼっていた末広さん(男性、当時79歳)とのエピソードである。末広さんは食べたいものを際限なく食べたり、他の入居者を指して「あいつら狂っている」とよくカンシャクを起こす、といったことを君塚さんと話していた。それでも、君塚さんが話すように「年寄りに我慢させてもね～」と私も思ってしまう。人ってそんなものであろう、といった気分を君塚さんと私は共有した。

昼過ぎ、末広さんに中央のホールで出会った。午前中と昼食の時間は顔を合わせていなかった。末広さんは、「2週間ぶり!」「先週サボったな～(笑)」「見ねえから来てないかと思った」と私に話しかけてきた。私はたぶん苦笑しながら先週末なかった言い訳(少し忙しかったことと雨が降っていたこと)をして、「(今日は)来ていますよ」と話した。末広さんのこういった突っ込みは、私を責めているのではなく、むしろ待っていてくれた気持ちの表明のようなもので嬉しく感じる。こういった直接的な表現の出来る彼を時折うらやましく感じる。

「外に行きますか!？」と誘うと、末広さんはそれには直接答えず、「明日買物に行くんだよ」「2時から2時間。2時間だと違うんだよね。1時間半だとなかなか買えない。2時間あると落ちついて買物できるんだよ」「(職員の)山田くんが連れてってくれるんだ。山田くんは勝手が分かっているからね」と話した。末広さんは私に会う直前に主任さんから明日買物へ行く旨を伝えられていて、それを私は遠目からたまたま聞いていた。末広さんは、主任さんから「ちゃんと買物するものをメモしていますか?」と尋ねられていた。末広さんは、次回の買物で買いこぼしのないように常日頃から小さな手帳にメモをしているのである。末広さんは買物に行けることが嬉しかったのだろう。

ところで、後に末広さんの部屋を訪ねた時に、買物に行って何をかうのか思わず尋ねてしまった。というのも、末広さんの部屋に行って改めて驚いたのは、ティッシュの箱が高く積み重なっていた

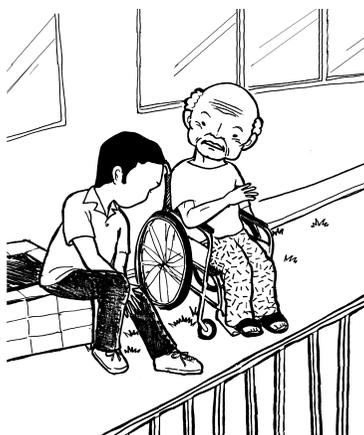


図3 エピソード3のイメージ図

ことである。20箱は下らないだろう。その他にも、(毎日煎れている) コーヒー用の水は末広さん曰く「3箱」(1箱につき2リットルが6本)残っていた。末広さんが買いたいと話するのは、夏用のパジャマであった。冷房が冷たいので、長袖のパジャマを買ってくると話している。これは前回の買物でも探していた。さらに、「買物に行けば、その他のものがいろいろ買えるし」と付け加えていた。

この付け加えの発言が私には興味深かった。私たちは「何を買いに行くの?」とすぐに目的を尋ねてしまう。そしてその目的が道理に合わない、具体的には職員さんが必要性を感じないと却下されてしまう。結果買物へ連れていってもらえない。そのために、買物へ行きなければ、もっともらしい目的を、理由を述べなければならぬ。しかし、買物とは目的だけであろうか。

ひとしきり末広さんと話した後、私は他の入居者からトイレ介助を頼まれ、一旦末広さんから離れる。そして先ほどまで末広さんと話していた中央のホールに戻ると、末広さんが自室の方向へ車イスをこいでいた。私は末広さんに近づき、再度「外に行きますか?」と尋ねると、末広さんは「行く」とはっきりと返される。「ただトイレに行った後だ」と末広さんは話す。私たちはしばらくして外へ行くことを確認し別れた。

どこで末広さんと待ち合わせをしたのかは忘れてしまったが、ともかく末広さんと外へ出て行った。外に出て建物の片方が日陰になっていたの、そちらの方へ行った。日向は暑くて居られた

ものではなかった。

その日陰のサイドへ行く時、末広さんが「ここで夏祭りがあったんだよな」「〜と〜を飲んで食べただけだったけど」「子どもたちが来ていたな〜」と話すので、私は「子どもさん来てたんですか?」と覚えがなかったので尋ねた。末広さんによると、長男家族と次男夫婦が来てらっしゃったらしい。

私は「子どもさんが来たなら、(そのイベントも)いい機会ですよ〜!」と強調すると、末広さんも「まあそうかな」と同意してくれた。

そのことをきっかけに子どもさんや亡くなった連れ合いの方の話始めた。また、家族の話から入居者の話へと連鎖していった。

私たちがしばらく施設の外の方向に体を向け並んで話していた時、玄関の方から声がしてきた。職員の佐藤さんがやってきたのだが、彼が玄関に出てきたのは新しい車が届き、事務所の横山さんが車の説明をするためとのこと。たまたまののだが、私も興味があったので、末広さんに「あっちに行きましょうか!?!」と誘って、車がある方へ向かった。車には郵便局の名前が入っていたが、半分寄付で半分自前らしい。車イスが一台載る三菱製の軽自動車だった。これまでにはない小回りが利きそうな車だった。

私が知っているだけで、照井さん、山田さん、佐藤さん、あと2人が集まっていた。その輪に入って末広さんと私も説明を聞いていたのだが、実際乗ってみる実験台がいるということで、末広さんをお願いをした。末広さんはいたって乗り気で

喜んでいた。末広さんの車イスを押して車に乗せた時に、「この車に初めて乗ったの末広さんですよ」と私が耳元でささやくと末広さんは満更でもない様子だった。

説明が終わり解散した後、日がさんさんと当たっている逆側のサイドへ行き、少し日差しを浴びた後に建物の中へと戻っていった。

後に末広さんは、車イスが載るような車は今後どんどん売れるだろうと話していた。末広さん曰く「じいさんばあさんがずっと家の中じゃ可哀想だろう！」

脳梗塞により左片半身麻痺になるまで奔放に生きてきた末広さんは、施設での生活に苛立つことがままある。私は末広さんと付き合っていて、末広さんが日々求めていることは、広い意味で外へ出ることであるように思える。本エピソード冒頭にカンシャクを起こすことがしばしばであると記した。末広さんの培ってきた気質も関係してはいるだろうが、一方で施設内に居続けることの息苦しさを末広さんは体現しているように私には思える。

エピソードで示したのは、本論の主題である外へ出ることにつながる事象であるが、その外へ出る機会を手に入れるため末広さんは日々知恵を絞り、なかなかしたたかに生活をしている。本エピソードで末広さんが示した外へ出ることに含まれる意味として、具体的に以下のようなものが挙げられるだろう。

(1) 外出の準備および外出を終えた後に生成する行為／体験

末広さんは外出の中でも、特に買物を好んでいる。最近は介護タクシーを利用し1人で買物に出かけるようになって¹⁰⁾。その末広さんが、介護タクシーを利用することはほとんどなかった当時、介護主任から明日買物へ行く旨を伝えられていた。末広さんは明らかに嬉しかったようで、堰を切ったように買物に行くことを私にしゃべり始めた。買物に行くことへの期待がほとぼしっているように私には感じられた。この後、末広さんが買物の構想を再度練りなおすであろうことは、(これまでの経験から)私には容易に予測できた。そして末広さんは、買物に行つて何を買うのかといろんな人に尋ねられ、私へ話していたようにいろんな人に「自分が買いたい～というものはその店にはあるだ

ろうか？」と尋ねるだろう。このように外出の準備をすることは、言い換えると未来に予定や約束があるということは、外出時だけの体験ではなく事前・事後と派生する行為や体験を生成する。未来に予定・約束があることは、買物計画を考えることや、買物という話題が出来ることにより末広さんが職員に話しかける、もしくは職員が末広さんに話しかけることを可能にしていると理解できるだろう。この時私には、末広さんの今・ここの生活が色彩を帯びるように感じられた。

(2) 外出時に生成する行為／体験

いつも散歩に行く場所で、末広さんは唐突に夏祭りの話を始めた。末広さんは施設へ来る前に起こった出来事の話、いわゆる昔話をすることが度々ある一方で、この施設に入居した後に起こった出来事を話すことがある。そして、入居後に起こった出来事として語られるのは、語るに値する出来事が限られるのか、限られた話を初めて語るように話される。来月催される予定であった夏祭りは度々話される出来事の一つである。そしてこのエピソードで特徴的なのは、催される／された場所を差しながら「ここで」話し始めたことである。具体的に行われた場所において語ることは、語る行為として正当なタイミングであるように私には思われる。ここではエピソード2と同様、意図的に語ろうとするのではなく、その場所にいることにより思い出されてしまい語り始めるという行為が生成していると理解できるのではなからうか。なお、「思い出されること」と「語り始めること」は切り離して前後関係として理解するのではなく同期していると考えべきであろう。

次に、車の使用説明を聞いている時に、末広さんは参加者の1人として輪の中にいたその姿が私にはとても新鮮であった。また、車イスを乗せる実験台として車に乗り込む姿はどこか誇らしげであった。その後、末広さんは上機嫌であったことから、車の使用説明に参加したことは楽しい体験であったように私には思われた。このように外で出会った職員が入居者と対等に接することは、外へ出た時に特徴的な事柄である。施設内において入居者と職員が対等ではないと必ずしも言えないが、施設内で職員は何かしらの役割を担っているため、職員と入居者との区分けがはっきりしてお

り、対等に入居者と向き合っ接することはそれほど多くない。しかし、外へ出ることにより特に職員の垣根が低くなるように私は感じている。そしてそのことにより、末広さんには行為や体験の機会が提供されている。

(3) 同伴者の存在

著者が末広さんと散歩に出かけるのは、ほぼ毎週であった。末広さんを散歩に連れて行くというより、図3が表すように外へ出て並んで駄弁っているという感じを私は持っている。週に1日しか私に来ないためか、時に私に向かって話したいようで車イスを私の方へ向けることがある。けれども、多くの時は2人並んで時を過ごしている。末広さん1人で外に座っていても、室内とは異なる環境に取り囲まれるため、その時間には意味があるだろう。さらに、私と2人で外にいれば、お喋り相手がいるため、1人で座っている時間とは違った側面で意味を持っているだろう。同伴者である私はお喋り相手にとどまらず、入居者に訪れている行為や体験と一緒に迎えることができることから(例えば、車の使用説明と一緒に参加したこと)、ともに体験を経ること、言い換えると、経験の共有、さらには後に当たり前に語られる2人の共通の基盤となるような経験世界が生まれているように思われる。具体的に言えば、後にその場所を2人で訪れた際、「あの時あそこで〜ということがあって」といった説明をせずとも伝わる土壌となる経験が2人の系(あいだ)に残っていると私は理解している。

さて、これまで同伴者という関係の中で生成し記述したエピソードを提示してきた。同伴者の存在に関して、ここで一旦まとめておきたい。「同伴者」とは、松本(2005c)で「同行者」として位置づけられていたことと関連している。松本(2005c)においても、調査協力者と同行者との関係は多くの実証研究で採られる態度、見られる者一見る者、語る者一聴く者という切り分けを超えていることに自覚的であったし、むしろ同行者がいることにより調査協力者の今・この行為/体験が生成し、それらを捉えうようになると積極的に位置づけていた。本論文において位置づける「同伴者」とは、私が施設の開所から約3年間毎週通い続け、現在でも入居者、さらには職員と関係を保つ

ているという長い時間軸の中での「同伴」という側面があり、日常入居者が散歩へ出かける時によく「同伴」していた、という側面も含んでいる。一方で、入居者や職員が私に同伴している側面があったように考えている。具体的には、ある週末なかつた私を次の週末末広さんが待ち構えて待っていたり、阿部さんがどうしたのかと心配してくれていたたり、さらには私来ないことにより入居者において少し不自由な生活を強いられたり、といったことがあった。また、(リップサービスかもしれないが)施設の施設長や介護主任に、私が施設にいと職員にどこか安心感があると何度か言われたことがある。余剰な動ける人員がいると助かるという程度の話かもしれない。ただし、そうであっても、私を無色透明な存在として見ているのではなく、私の存在がどこか彼/彼女らの生活に影響を与えていたことがあったのではないかと考えている。これらが、施設の入居者や職員が私に同伴しているという感覚である。

さらに、この施設に居ることが、私が日々生活を続ける中でどこか欠かすことのできない時間、さらに言うところ週一日居る時に、日々生活を続けていく上でどこか救いとなる瞬間が訪れることに、私はある時気づかされた(一方で、施設に向かう足取りが重い時も当然あった)。施設環境にはどのような行為や体験の機会が潜在しているのか明らかにする過程で、このような同伴し同伴されるというダイナミズムそのものを描き出し、その同伴関係を考察することが、施設に居住する高齢者の生活の質を描き出すことに繋がるのではないかと今私は考えている。

総合考察

エピソードと解釈の提示を経た上での総括

本論文を通して行われたこと、および見出された知見に関して総括を行う。

本論文では、①高齢者の日常生活における「外へ出ること」に注目してきた。その上で、②高齢者の日常生活における「外へ出ること」に含まれる意味」とは、

どのようなことであるのか探索を行ってきた。そして、③具体的に行われたこととして、外へ出る前および出た後を含めた1回の外出の様子を出来る限り切り刻まずに提示した。主に、外出前中後に生成する行為や体験を描き出し、その場に同伴していた筆者である私の解釈を示してきた。

これらの作業を経て見出された知見の1つ目として、「外へ出ることは、外出時だけに閉じるのではなく、外出前後へと波及する事象である」ことが挙げられる。外へ出ることによって、入居者において様々な行為や体験の機会が享受されることをこれまで具体的に提示してきた。

2つ目の知見は、「外へ出ることに含まれる意味とは、これまで描き出されてきた外出に際して行為が実現し体験が生成することそのものである」ということである。例えば、エピソード1において、塚本さんがトラックを怖がり少し急くように移動することを促していた。この行為や体験は、外へ出ることに含まれる意味であろうか。現時点では以下のような理解をしている。塚本さんにおいて、移動を促すという行為が実現していることやトラックを怖がり急かすという体験が生成していることが、その行為や体験が意味fulであることを物語っている。つまり事後的に振り返れば、意味があるからこそ実現し生成したのである。よって、外出することに含まれる意味とは、外出前中後に行為が実現すること、そして体験が生成することそのものであると考えた。本論文においては、外へ出ることにより実現する行為や生成する体験を描き出し、同伴していた私の解釈を示してきた。

さて、原則として、外へ出ることが高齢者の生活においてどこまで／どのように波及しているのか、つまり外出することにより実現する行為や生成する体験全てを捉える／語りきることは出来ない。また本論文では、実現した行為や生成した体験を同伴する私が描き出しているわけであるが、その行為や体験の意味は本来的には語りえない／難しいことのように思われる。なぜなら、松本(2005b, 2005c)において「包含」という機制を基に述べたように、行為や体験とは実現／生成してしまっていることであると考えられるからである。つまり、外部から「外出とは～だから意味fulである」と意味づけることは、あくまでも事後的に行われ

ることであり、行為や体験とその意味との内的関係を語っていることにはならないように思われる。むしろ、行為が実現し、体験が生成していることそのことが、行為や体験が意味fulであることを物語っており、描き出された行為や体験を通して外出することに含まれる意味とはどのようなことであるのか、その「内-質」(内側において感じられる質)を読者において感受していただくことが本来的ではないかと考えた。

今後私は、施設環境において実現し生成する一方で語りえない／難しい「外へ出ることに含まれる意味」を、さらに踏み込んでわざわざばかりでも語るつもりである。けれども本論文においては、まず捉え／語りきれない行為や体験が存在すること、そして行為や体験の意味が語りえない／難しいことを、私が読者へ直接語ることは出来ないとしても、エピソードと解釈を通して示し語らめたいと欲し、結果長尺とも思えるエピソードと解釈を記すことになった。

最後に、これらの議論を経た上での今後の課題を述べておきたい。松本(2005b, 2005c)では、主に在宅高齢者における外出している時の行為や体験が生成している様子を実際の外出に同行することにより記述し、外出することの意味を理解してきた。これらの研究は、家(内)をいつも居る場所である、帰るべき場所であると定位した上で、外出することの意味を探究している。つまり、家(内)の意味はそれほど省みられずこれまで研究を行ってきた。しかし外出することの意味を考える際には、問題部で紹介した Rowles(1978a, 1978b, 1980)のように家(内)の意味を併せて考える必要があるだろう。具体的には、家(内)→外→家(内)→外→……という螺旋状のダイナミクスを捉える必要がある。これは「外へ出て、内(家)に帰る」過程、「外-出」、「内-帰」と表記しうるような切り離せない表裏一体のダイナミクスと言い換えられるだろう。そして、この作業は高齢者の生活全般を捉えようと試みることに重なってくると私は考えている。

その時に通常であれば、在宅高齢者の自宅内における行為や体験を理解しようと試みるだろう。しかし筆者である私は、たまたま施設に居住する高齢者と長い間付き合いがあった。施設の高齢者と付き合っていると、本論で記したように、なかなか外へ出る機会が訪れない現実の他に、自宅へ様々な事情により帰ること

が出来ない、知人でもない人と同室に居住することになるなど、この施設という場所がどのような場所であるのか、私は考えざるをえなくなった。そして在宅高齢者のように一例えば、エピソード2において阿部さんが見せた施設内において外出体験に準ずる体験が存在することが示唆するように「家(内)」と「外」が自明のものとして定位できないことを本論を通して私は了解した。

私は施設環境において欠けている大切な何かを明らかにする上で、「家(内)」と「外」という視点は重要ではないかと考えている。そして、施設環境を「家(内)」と「外」という視角から理解することは、翻って外へ出るという事象にまつわり在宅高齢者の生活において何が不可欠な事柄であるのか自ずと導き出されると私は考えた。

今後私は、どのような行為や体験が生成しているのか、その全てを語りきることは出来ないが、長い時間施設に居続ける中で施設内外に潜在していると思われる行為や体験をさらに描き出し解釈することを通して、高齢者の生活において大切な欠かさざることを明らかにしていきたいと考えている。

再考

本研究において行われたこと

施設環境内外において、入居者には日々どのような行為や体験の機会が訪れているのか明らかにすることが本研究の主題であった。そして、本論において具体的に行われたこととして、同伴した著者において体験された事象を描き出すことと同時に、その解釈をこれまで記してきた。これらの営みの位置づけに関して少しだけ述べておきたい。ここでは、「命題として有意味であるけれども検証されえない命題があること」を軸に考えていく。

まず、ウィトゲンシュタインから断片的影響を受けたとされるウィーン学団の検証理論を始原とする論理実証主義は、実験や観察において検証されることのみを科学的命題とする。そして、検証不可能な命題は

無意味であるとする。これが多くの心理学研究が規範とするパラダイムである。Malcolm (1964/1980)は、ウィーン学団と行動主義の中心的存在スキナーとの相違点を議論する中で、「証明という概念は、1人称の心理的報告や表現の多くには適用されはしない。別の言い方をすれば、このような(1人称の)報告や表現は観察に基づいていないということである」と述べている。本論に照らし合わせると、同伴者として私が入居者と付き合う中で1人称(私、我々)として体験され記述された事象は、検証や証明という概念とは縁遠い。

検証(継承)を巡るやりとりは、西條(2002)とやまだ(2002)において行われている。このやりとりに私が疑問を呈したいのは、特に以下の2点である。①西條において新たな分析視点として「語り手の内側に入りこんだ言語化・分析」が提起されているが、実際にはテキストを対象化した上で分析を行い、「感受性や情動が高まる」といった内的な心理過程を表す用語により外部から説明したに過ぎないのではなからうか。②やまだにおいて、再現性や一般性への指向性が再三繰り返されているが、やまだの諸々の見解は一例えば、「天気」から「明るい天空・天気」へと発展する際の考察-テキストとの対話が混在する自身の経験から導き出されたように思われ、再現性や一般性は保障されないのではなからうか。

狭義の科学コミュニティにおける知的ゲームにおいて、知見の積み上げが求められることは私も承知している。しかし、人文科学において検証ということが可能になるのは、やまだ(2002)が指摘する通り、我々の体験を外部から客観的に事実関係を規定できる用語により記述する場合に限るのである。なぜなら、検証可能な仮説とは、コミュニティが限定されるとは言え、誰においてもコミット可能な客観的命題でなければならぬからである。上述のやりとりを経て理解されるのは、質的研究は依然検証という枠組みに囚われているということではなからうか¹⁾。

質的研究とは、我々自身や彼/彼女らに訪れる日々の行為や体験の質を捉える営みであると私は理解している。行為や体験の質を捉えることへの貢献とは、我々生活者が気づいていなかったり、大切だと直感しつつもその意味を明示できなかった事象に、研究者がそれは大切なことだとスポットライトを当て、なぜ大切で

あるかを示し語ることであろう。その時、松本 (2005a) において述べたように、一般的な構成概念に押し込めるのではなく、〈この体験〉そのものを大切に語ることをまずは求めるべきではないだろうか。そして、語られた言葉が自ずと示す事象の「内・質」を問うのが質的研究ではないかと私は考えている。ウィトゲンシュタインは最晩年の草稿「確実性の問題」(1969/1975)において、「204 証拠を基礎づけ、正当化する営みはどこかで残る—しかし、ある命題が端的に真として直感されることが終点なのではない。すなわち言語ゲームの根底になっているのはある種の視覚ではなく、われわれの営む行為こそそれなのである」と述べている。研究者における行為とは「書くこと／記述すること」がまず挙げられるが、視覚において対象化し静的なモノとしてラベル張りをするのではなく、思わず驚いたり笑ってしまったり目を覆ってしまったりといった研究者自身事象の内部に巻き込まれる中で実現した行為としての記述が求められるのではなかろうか。そして、行為として記述を受け止めることは、論文(書かれたもの／記述されたもの)を読む読者においても求められることであろう。具体的には、本論を通過した読者において外出することの大切さを感じ、何かしらの実践へと繋がることを期待している。

事象の内部において1人称的に事象を語ることは、狭義の主観的、つまり独りよがり判断されかねない危うい橋を渡っている。しかし、有意味と思われるが検証されえない命題を語らしめる場合、私たちの経験を通した事象を語っていくしか方法はなく、松本 (2005c) において川喜田 (1986) の言葉を援用し述べたように、研究の恣意性はエピソードの中身で、解釈の中身で、知見の中身で判断されるべきものであると私は考える。よって、本論においては、描き出されたエピソードと語られた解釈それ自体がこれまで語られてこなかった事象を表すよう試みてきた。エピソードはエピソードとして、解釈は解釈としてその質が吟味されることを期待したい。

注

- 1) 本論文では、筆者を指す言葉として、「著者」と「私」という言葉が使われている。「著者」とは、

施設での出来事を対象化し説明的に語る場合に用いられている。一方、「私」とは、主にエピソード中の筆者およびエピソードを解釈している筆者を表している。「私」と表した2タイプの筆者は、異なるポジションに立っているように思われるが、いずれも「私」として連続している。出来事の現場に居合わせ体験した「私」においてエピソードは描かれ解釈されるという一連の流れが生成している。

- 2) そもそも、閉じこもりという事態が不明なままに、行為主体の特徴から閉じこもり要因を推察したとしても、それらの特徴が何に繋がっているのか明らかではない。つまり、閉じこもりという事態と行為主体の特徴との間に、必然的な因果関係が成立していない。また、多くの研究知見において、「閉じこもり」という事態の原因を行為主体の認識に委ねてしまうことの問題を指摘する必要がある。質問紙による行為主体の認識を尋ねただけでは、「閉じこもり」という事態へ収束していく、もしくは巻き込まれていく本人の体験にはたどり着かないのではなかろうか。
- 3) Carp (1971) においては一方で、モータリゼーションが進むアメリカの高齢者において、移動の手段として歩行への満足度が著しく低い傾向を受けて、歩行における難点と利点をインタビュー調査により提示している。具体的に難点として、“目的地が歩行可能な距離の範囲にないこと”、“不安(強盗などに襲われた時周りに誰もいないこと、車に轢かれること、転倒すること、道に迷うこと)”、“健康上の理由で移動距離を歩行出来ないこと”が挙げられている。一方、利点として、“ほどよい運動が出来て健康にいい”が圧倒的に多く、少数意見として“お金がかからない”、“人ごみの中を歩くのが楽しい”、“車のように渋滞や駐車場の心配をしなくていい”、“気ままな感じをもたらしてくれる”、“近道が出来ること、針路からそれる喜び”が挙げられている。
- 4) Rowles (1978a, 1978b, 1980) が実践する「体験的フィールドワーク (experiential field work)」とは、「人の体験世界の複雑な景色 (landscape) の探索を奨励する」(Rowles, 1978a) として、大まかに以下のようなことを含意している。①主観的な知は、極論としては唯我的であり、直接にはアクセスできない。一方で、客観的知、つまり過度に抽象化されたものを理解することで我々は欺かれたことになりかねない。②「個人間における知 (interpersonal knowing)」の可能性を模索する。個人間における知の核心とは、体験的でグラウンデッドな記述の生成が個人間における知という中間過程を経て主観的知を模写 (facsimile) するに至ることである。③個人間にお

ける知の探索は、我々の注目している調査協力者が日常世界に没頭していることを求める。そして、我々は後ろで待機しているのではなく、むしろ近くで描き出す。よって、調査協力者と研究者との個人間における関わりが発展した時に、経験的なテキストから解釈が導き出されることは必然的帰結である。

また、Rowles の方法で興味深いのは、様々な資料から意味を理解する際に、「生の体験 (raw experience)」を表す素朴で個人間における記述 (我々による記述) を理解することと、滞りなく営まれる各々の生活の現実を無理に解剖するのではなくむしろ描写するために、資料からカードを作成し、長い時間分類を繰り返すことによりテーマの創出 (emergent) を行っている点である。さらに、このプロセスを経ることで、Rowles 自身が記述をする際持っていたフレームワークが発展するとしている。これは、「KJ 法」(川喜田, 1986) に似た考え方はないかと理解している。

- 5) この記録メディアを使用せず「肉眼で見る」ことについて、石野 (2004) による優れた論考がある。私は、石野の「肉眼」という言葉の「肉」(肉感, 受肉) という質感と、石野による「長期」の「関与的観察」(石野, 2003) が重要であると考えている。
- 6) 進藤さんは、少し天真爛漫なところがあるため目を離すことは出来なかったが、車イスを自力でこぐことが出来ていた。一方、塚本さんは自力で起き上がることがままならない状態にあった。この時私は進藤さんを気遣いつつ、基本的には塚本さんの車イスを押していた。
- 7) 阿部さんが度々散歩の誘いを断るのは、「自分ばかり散歩に行って申し訳ない気持ちがある」と、本人からこれまで何度か聞いている。
- 8) 以前一緒に散歩へ来た時、マンションは改修工事中であった。前回散歩に行ってから、3ヶ月弱経っていた。
- 9) 私が散歩に誘う時は、車イス1台しか押すことが出来ないため、1人の方と連れ立って出ることが多い。エピソード1のように、複数人と外に出る際は車イスを自分でこぐことが出来る人がいなければ難しい。よって、多くの外出は入居者と私の2人で行くことになる。
- 10) ただし、介護タクシーの利用料が末広さんには負担が大きいため、たまにしか利用はしない。利用する際には、買物計画の熟考に熟考を重ねて挑んでいるように見える。また、利用する際は一旦職員を通すため、買物に行きたい旨を受けて、介護タクシーを利用せずに職員が買物に連れて行くこともある。
- 11) 「検証という枠を超える」解釈を行っているやまだ

(2002) が「検証という枠にとどまる」ことを促し、一方で「検証という枠にとどまる」解釈を行っている西條 (2002) が「検証という枠を超える」ことを言明するという真逆の言動不一致が両者に起こっているように思われる。本論では西條の言明と同様に、質的研究は「検証という枠を超える」ところにオリジナリティがあると考えるが、その具体的な実践に関しては上記のやりとりに見られるように依然錯綜しているというのは言い過ぎであろうか。なお、大倉 (2005) において、「仮説継承」という枠組みに関する批判的検討を行う過程で、質的研究に望まれる実践の1つのあり方が具体的に示されている。

引用文献

- Altman, I., & Rogoff, B. (1987). World view in psychology: Trait, interactional, organismic, and transactional perspectives. In Stokols, D., & Altman, I. (Eds.), *Handbook of environmental psychology* (pp.7-40). New York: Wiley.
- Carp, F. (1971). Walking as a means of transportation for retired people. *The Gerontologist*, 11 (2), 104-111.
- 石野秀明. (2003). 関与観察者の多様な存在のありよう——保育の場での子どもの「育ち」を捉える可能性を探り当てる試み. *発達心理学研究*, 14 (1), 51-63.
- 石野秀明. (2004). 肉眼による観察——「関主体的な知」を紡ぎ出す地平を拓く. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編). *質的心理学——創造的に活用するコツ* (pp.134-139). 東京: 新曜社.
- Ittelson, W.H., Proshansky, H.M., Rivlin, L.G., & Winkel, G.H. (1974). Man/Environment transactions: Some guiding assumptions. In Ittelson, W.H., Proshansky, H.M., Rivlin, L.G., & Winkel, G.H. (Eds.), *An introduction to environmental psychology* (pp.80-101). New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- 川喜田二郎. (1986). KJ法——渾沌をして語らしめる. 東京: 中央公論新社.
- 河野あゆみ. (2000). 在宅障害老人における「閉じこもり」と「閉じこめられ」の特徴. *日本公衆衛生誌*, 47 (3), 216-229.
- Malcolm, N. (1980). 心理学の哲学としての行動主義 (村山正治, 編訳). *行動主義と現象学——現代心理学の対立する基盤* (pp.205-237). 東京: 岩崎学術出版社.
- (Malcolm, N. (1964). Behaviorism as a philosophy. In Wann, T.W. (Eds.), *Behaviorism and phenomenology: Contrasting bases for modern psychology*. Chicago: University of Chicago Press.)

- 松本光太郎. (2004). 高齢者の外出における「立ち寄り」の検討——ある地域に居住する高齢者への自由記述アンケートから. 九州大学心理学研究, 5, 77-88.
- 松本光太郎. (2005a). 環境老年学の軌跡とその潜在性——高齢者における環境体験の探究に向けて. 都市・建築学研究 (九州大学大学院人間環境学研究院紀要), 7, 29-37.
- 松本光太郎. (2005b). 行為／体験から描き出される高齢者の外出を取り巻く意味世界——同行という方法による事例的考察. 九州大学心理学研究, 6, 57-67.
- 松本光太郎. (2005c). 高齢者の生活において外出が持つ意味と価値——在宅高齢者の外出に同行して. 発達心理学研究, 16 (3), 265-275.
- 村瀬孝生. (2001). おしっこの放物線——老いと折り合う居場所づくり. 東京：雲母書房.
- 内閣府. (2001). 平成 12 年度 高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査.
- 内閣府. (2003). 平成 14 年度 高齢者の健康に関する意識調査.
- 大倉得史. (2005). 「仮説継承型」質的研究の批判的検討. 九州国際大学教養研究, 12 (1), 1-24.
- Relph, E. (1999). 場所の現象学 (高野彦彦・阿部隆・石山美也子, 訳). 東京：ちくま学芸文庫. (Relph, E. (1976). *Place and placelessness*. London: Pion.)
- Rowles, G.D. (1978a). Reflections on experiential field work. In Ley, D., & Samuels, M.S. (Eds.), *Humanistic geography: Prospects and problems* (pp.173-193). Chicago: Maaroufa Press.
- Rowles, G.D. (1978b). *Prisoners of space?* Colorado: Westview Press.
- Rowles, G.D. (1980). Growing old "inside": Aging and attachment to place in an Appalachian community. In Datan, N., & Lohmann, N. (Eds.), *Transitions of aging* (pp.153-170). New York: Academic Press.
- 西條剛央. (2002). 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り——「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示. 質的心理学研究, 1, 55-69.
- 仙田裕子. (1993). 高齢者の生活空間——社会関係からの視点. 地理学評論, 66A (7), 383-400.
- 権野亜紀夫・中村攻・木下勇. (1999). 高齢者の日常的外出形態の構造分析. 千葉大学園芸学術報告, 53, 47-57.
- 竹嶋祥夫. (1993). 立地条件の違いによる高齢者の外出行動に関する研究——有料老人ホーム居住者を事例として. 老年社会科学, 15 (1), 15-29.
- Wittgenstein, L. (1975). 確実性の問題 (黒田亘, 訳). ウィトゲンシュタイン全集 9 (pp.1-169). 東京：大修館書店. (Wittgenstein, L. (1969). *Über Gewißheit*. Oxford:

Basil Blackwell.)

やまだようこ. (2002). なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか?——質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル. 質的心理学研究, 1, 70-87.

横山博子・芳賀博・安村誠司・藺牟田洋美・植木章三・島貫秀樹・伊藤常久. (2005). 外出頻度の低い「閉じこもり」高齢者の特徴に関する研究. 老年社会科学, 26 (4), 424-437.

謝 辞

施設 M には、これまで 4 年以上受け入れていただいている。本論文掲載の許可をいただいたことと併せて、入居者および職員の皆さんに感謝の気持ちを伝えたい。

次に、光安輝高さんには本論文作成に欠かせなかった理論的示唆をいただき、木下寛子さんにはエピソードを読んだ上で素敵な絵 (図 1~3) を描いていただいた。また、村上さん、大倉さん、文野さん、チャドさん、そして津田さんには草稿を読んでいただき、ていねいなコメントを寄せてもらった。感謝したい。

それから、査読の先生からは率直に疑問や課題を投げかけていただいた。それらに応えることは悩ましくも楽しい作業でした。感謝いたします。

最後に、2007 年 1 月 1 日に風間岩雄さん (仮称 末広さん) が亡くなった。風間さんにはいろいろとお世話になった。ありがとう。ご冥福をお祈りします。

(2005.3.31 受稿, 2006.6.8 受理)